

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	普通選挙に就て：雑録
Author(s)	松山，豊造
Citation	龍南會雑誌， 97： 38 - 47
Issue date	1903-02-25
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5454">http://hdl.handle.net/2298/5454</a>
Right	

# 普通選舉に就て

講師 松 山 豊 造

三十八

(昨年十二月龍南會演說部例會に於てなしたる講演の概要)

本年四月、伯耳義國に社會黨の紛擾ありて、十數人の死傷者を出したることありしが、其原因は全國の議會に於て、普通選舉制度採用の法律案を、否決したるにありと云ふ。此一例を以て見るも、普通選舉の問題は、時に一國の大問題となり、非常の紛擾を醸することあるものたるを知るべし。我國に於ても、此問題が昨年の議會に現はれ、又現に普通選舉期成同盟會なるものを組織し、熱心に之れを主張するものありて、兎に角注目すべき一の社會問題なり。依りて吾輩は茲に、普通選舉とは如何なるものなりや、其利害得失如何、又此制度は現今諸國の法制に於て、如何なる地位を占むるや等に就て、簡單に述べんとす。

抑々普通選舉とは、財産を所有すると否とを問はず、又其財産額納税額の多少に拘らず、凡て均一の選舉權を與へて、各人民をして均しく議會の組織に參與することを得せしむる制度を云ふなり。勿論普通選舉と雖も、必しも凡ての人民に、普く選舉權を與へざるべからずと謂ふにあらず。年齢男女の性、刑罰の有無等により、多少の制限を附するは少しも妨げなき也。要するに、財産を以て選舉權に差等を設くるの源因とせざることは、即ち普通選舉の特質たるなり。

普通選舉の基く理論は、佛國革命時代に於て、深く人心を支配したる天賦人權の説に存す。即ち各人は生れながらに自由にして、平等なる天賦の權を有するものなり。而して國家の主權は、全國民に屬す。故に全國民が、舉て國家の政治を行ふべきものなれども、斯の如きは今日の大國に行ふべ

からざるを以て、人民全体より代議士を選挙して國會を組織し、全國民に代りて其主權を行はしむるものなり。故に全國民は一樣に平等に選挙權を有し、國會の組織に參與するの權利あり。而して此權利は天賦の權にして、法律を以て奪ふことを得ざるものあり。然るに今選挙權に對して、財産上の制限を加ふるが如きは、不當に各人民固有の權利を奪ふて、一部の階級に屬するものに、一種の特權を與ふるものにして、各人平等の自然の元則に反せり。選挙權は、各人をして之を有せしめざるべからず。普通選挙は、自然の原則なり、絶對の理論なりと云ふにあり。

此議論は甚だ單純にして、又極めて明瞭なるが如きも、吾輩は全然之れに服すること能はず。元來天賦人權各人平等など云ふ議論は、當時の社會に重大なる影響を及ぼし、深々人々の思想に浸み込みたるものなれども、其議論の極めて淺薄にして、且つ誤れることは、今更喋々するまでもなく、既に一般の認むる所なり。普通選挙は、此議論を根據とするものなるが故に、既に其根本に於て、大なる誤謬を含めるものなりと云ふべし。加之、人民の選挙に従事するは、人民の權利たるには相違なれども、此權利は全時に重大なる責務を伴ふものなり。即ち國家の機關たる議會を組織する爲めに、國民が國家に對して負擔する重大なる責務なり。其責務は寧ろ主にして、其權利たるや却て従なり。現に或學者の如きは、選挙權と云はんよりは、宜しく改めて選挙の義務と稱するを可とすと云へり。果して然らば、選挙の制度を論するに當りては、寧ろ重きを此責務と云ふ點に置いて觀察せざるべからず。單に選挙權の普及擴張と云ふ點にのみ着眼して、其結果として生ずる議會の組織の適否如何を顧慮せざるが如きは、選舉制度の本旨に反し、其本末を轉倒するものなり。然るに普通選挙を主張する論者が、單に選挙權を權利の側面よりのみ觀察し、人民の自由權利と云ふ點の

みに重きを置くは、從來諸國に於て人民の參政權を認めざりし狀況の反動として、只權利と云ひ自由と云ふことに眩惑し、其權利の裏面には、重大なる義務の伏在することを悟らざるに起因する。雖も、議論としては正鵠を得たるものにあらず、甚しき僻說なり。この故に吾輩は、論者が普通選舉を以て自然の元則なり、絶對の理論なり、選舉の制度は必ず普通選舉によらざるべからずと謂ふは、大なる誤なること斷言するなり。

然れども吾輩は、敢て普通選舉を全然排斥するものにあらず。寧ろ之れを歡迎するものなり。蓋し人民をして國政に參與せしめ、萬機公論に決することは、今日政治上の大主義とする所なり。この主義より推論するときは、成るべく選舉權を擴張し、一般人民をして均しき議會の組織に與らしめ、一方に於ては、彼等をして普々其意思を國政上に伸ぶるの機會を得せしめ、一方に於ては、これによりて大に義勇公に奉ずるの精神を養成せしむることは、最も希望すべき所なり。且又選舉權に不當の制限を附するときは、下級の貧者が些も政治に參與すること能はず、徒に一部優族の壓制する所となり、其極遂に革命の紛亂を招致するに至るやも計るべからず。此點より見るも、選舉權の普及、普通選舉の實行は、大に希望せざるべからざるなり。然れども既に述ぶるが如く、普通選舉は如何なる國家に於ても、亦如何なる狀態の下に於ても、直に實行せざるべからざる自然の原則にあらず。一に各國政治上の便宜に屬する問題なるが故に、其之を實行すべきや否やは、各國經濟上社會上の狀態如何を斟酌して、決せざるべからざるなり。

然らば現今の社會に於て、普通選舉の實行は果して完全なる効果を收むることと得べきやと云ふに、吾輩の考ふる所によれば、不幸にして現今の社會の狀態は、未だ普通選舉の完美なる効果を收むるこ

と能はざるべし。其理由の主たるもの左の二つにあり。

(一) 普通選舉制度の結果は、代議の本旨に適合する議會の組織を得る能はざること。

代議の本旨に適合する議會とは、學者の所謂比例代表の實を擧げたる議會なり。比例代表とは、一國社會に於ける各種の勢力を、其實際の狀態に比例して議會の組織に編入することを云ふなり。この事は獨乙の「ブルンチユリ」が、譬喩を以て巧に説明する所なり。其説明に曰く、國會は國民の地圖なり。地圖が山川、海陸、原野、都邑の狀態を、其實際の大小、高低、長短に比例して縮寫するが如く、國會も亦社會上各種の勢力を、其實際の大小に比例して、之れを模寫せざるべからずと、蓋し今日の國家を組織する各個人は、個人としては平等ならず、智愚貧富の別あり。階級としても其勢力を同ふせず、優劣の懸隔あり。故に若し現時の社會の組織を根本より打破改造して、各個人の勢力、各個人の利益を均一ならしむるにあらざれば、少數の人が却て多數の人よりも、社會全体の運命を支配するに、與りて大なる勢力あるを免れず。而して社會の健全なる發達は、却て優等の階級に屬する卓越先覺の人士が、能く自己の地位勢力を利用して、下級多數の人民を誘導するによりて、顯はるゝものにして、平等は寧ろ進歩の敵なりと云ふべし。故に一國社會に於ける各種の勢力は、國家の機關の編成に於ても、亦之れを無視することを得ず。議會の組織に於ても、亦宜しくこれ等の勢力を、適當に斟酌せざるべからずと謂ふにあるなり。今普通選舉の實行は、何故に上述の比例代表の目的に反するやと云ふに、元來下級の人民は、其數に於て遙に上級の優族を凌ぐことは、言ふ迄もなし。故に若し一般人民に、均一の選舉權を與ふるときは、數量は品質を壓し、議會に於て多數を占むるものは、下級劣者の代表者たるに至らん。斯の如きは、社會の諸勢力を實際に比例するにあらすして、却て之れを逆倒するもの

と謂はざるべからざれば也。

(二) 普通選舉の實行は、選舉の弊害を助長すること。

選舉は國民が國家に對して、負擔する重大なる任務なること、既に述べたるが如し。而して此任務は、純潔に公正に之れを行はざるべからず。選舉人をして、完全にこれ等の任務を行はしむるには、少くとも左の條件を必要とす。

(イ) 學識 選舉の目的如何、議員の任務如何を理解し。如何なる人が能く其任務に適するやを識別し、他人の勸誘に迷はず、能く其所信を斷行するの見識なかるべからず。

(ロ) 民徳 誠實奉公の精神、公共の爲めに盡力するの氣質なかるべからず。徒らに私利私益のみを計るの徒輩をして、選舉に従事せしむるときは、賄賂其他の弊之れに乘し、選舉の公正純潔は、決して之れを保つこと能はざるべし。

(ハ) 餘暇 公務に盡力するには、少くとも一家の生計確立し、且つ幾分の餘裕ありて、絶へず政治上の利害に注目するの餘暇なかるべからず。日夜衣食に奔走するの徒をして、平常國家の政治に着眼せしめ、熱心選舉に従事せしむることは、到底望むべからざる所なり。

偕て下級の人民は果して、此等の條件を具備するやと見るに、第一日夜營々糊口に奔走するものは、公務に盡すの餘暇なきは勿論なり。又財産の多少は、智徳の程度を表明するの唯一の標準とするに足らされども、所謂恒産なきものは、恒心なきものなり。又教育を受くるには、多少財産上の餘裕なかるべからず。故に一般の推測としては、財産の有無を以て、智徳の程度を計るの標準とするも、亦甚だ誤らざるに庶幾からん。果して然らば、下級の貧愚をして、一般に選舉に従はしむるは、選舉の弊害をし

て却て大ならしむるの恐れあり。

之れを要するに、普通選舉は絶對の理論にあらず、便益の問題なり。立法上、素より希望すべき所なれども、文化の發達、尙未だ普く社會の下層に及ばざる今日の狀態に於て、直に之を實行するは却て選舉の弊を助長し、代議の本旨に反するの結果を生ずるに至らんなり。現に此制度を實行する歐米の諸國に於ても、亦種々の弊害を認め、これを救済するの策を講しつゝあるなり。左に少しく各國の實例に就て述べんに、現今普通選舉の制度を採用するものは佛蘭西、北米合衆國の如き共和國を始めとし獨逸帝國、丁抹、伊太利、葡萄牙等の諸國これなり。

佛蘭西に於ても、革命以來屢々變更せられたる毎回の憲法に於て、絶へず普通選舉の制度を採用したるにはあらず。一八四四年の第六憲法の如きは、實に直接國稅三百フランク以上を納むるものにあらずれば、選舉權を與へざりしなり。然るに當時この高度の制限の下に於て、選舉權を得たるもの、僅々廿萬人に過ぎざりしが故に、下級人民の不平的運動を誘起し、選舉權に對する財産上の制限は、痛く非難せられ、遂に一八四八年の憲法以來、己むことを得ずして普通選舉の制度を採用し、以て今日に及びしなり。北米合衆國及び其諸州に於ても、亦久しき以前より普通選舉を實行す。然れども其諸州に於て、此制度を實行するに至りしは、人口の稠密を計る爲めに、移住民の渡來を獎勵せんとする商略的の計算に基因するものにして、投票函の前に於ける平等は、實に移住者の渡來に向て、拂ふ所の報償にてありしなり。此制度の採用が、人口稀少なる西部の諸州より始り、當時既に稠密なる人口を有したる東部の數州に於ては、選舉權に財産上の制限を加へたりしが如きは、其證とするに足る。獨逸帝國に於ても、亦其歷史上の沿革と、其聯邦國たる特殊の事情あるとにより、普通選舉の

制を採用すと雖も、之れを以て敢て完美なる制度と認むるにはあらざるなり。故にこれに伴ふ選舉の弊害を、矯正する一の手段として、議員に歳費を支給せざるの方法を設く。然れども從來の經驗によれば、此手段も亦其實効を奏すること少しと云ふ。丁抹も亦一八七六年以來、選舉權に對する財産上の制限を廢せり。然れども全時に種々の弊害の、之れに伴ふべきを豫期し、選舉人の年齢に高き制限を加へ、被選舉人たるには二十五歳以上なるを以て足れりとする。反し、選舉人たるには三十歳以上なることを要するとせり。次に伊太利は一八八二年以來、葡萄牙一八八四年以來、共に普通選舉の制度を採用せり。然れどもこれと全時に、選舉人は教育上の制限を附して、其弊害の幾分を除かんとせり、即ち此二國の法制に於ては、讀書の能力なき者には、一切選舉權を與へず。以上諸國の外、西班牙は一八七八年の選舉法の改正まで、普通選舉の制を採り、普露西も亦一八四九年以前は、この方法によりて下院を組織したりしが、今や共に之れを廢せり。

以上述ぶる所の實例によるも、既に普通選舉制度の弊に堪へずして、之れを廢止したるものあり。又現に其弊を認めて、種々の救済策を講ずるものあるを知るに足らん。要するに、選舉權の擴張は現時に於ける一般の傾向にして、社會の進歩に應じて次第に其制限を寛にするは、立法者の宜しく勉むべき所なれども、今日に於て、普通選舉と斷行せんとするの運動に至りては、吾輩之れに賛成するの勇氣なし。寧ろ竊に、却て多數の無智無識の徒を煽動して、忌むべき紛擾を招くに至るやも、測り知るべからざるを恐るゝなり。總て社會問題の解釋は、慎重に慎重を加へられば、或は世を過るとなしとせず。

普通選舉は、現時の社會に於て尙未だ完美なる効果を收むることを得ずとすれば、今日如何なる制度



を採用するを以て、最も適當なりとすべきやと言ふに、是れ各國の現状を、一々審かに考察して、然る後に決すべき實際問題なり。依て吾輩は、茲には唯普通選舉制度以外に於て、現今諸國に行はるゝ選舉制度を紹介し、簡單に其利害得失を叙するに止めんとす。即ち制限選舉、複數選舉、等級選舉の三制度これなり。

制限選舉とは、選舉權に一定の財産上の制限を附し、其の制限以上の財産を有する者には、凡て均一の選舉權を與ふる制度を云ふ。而して其の制限の程度如何は、各國經濟上の狀態によりて異なり、必しも一定の標準あるにあらず。只立法者の專斷に流れざるを要するのみ。又其財産額を算定するに於ても、或は納稅額を以て標準とするものあり、土地家屋の所有、又は占有を以て標準とするものあり、或は財産の價格によるものあり。其孰れによるべきやも、亦單に立法の技術に屬する問題なり。只茲に一言附記すべきは、納稅額を以て財産の多少を推測する場合に於て、世上或は誤解するものあることこれなり。誤解する者は以爲らく、納稅の義務と、參政の權利とは、互に報酬をなす、納稅せされば參政權を得ず、參政權を與へされば納稅を拒むことを得べしと。これ思ふに、英國などには於ける古來の沿革を見て唱ふる所ならん。然れども今日の理論に於て、納稅の義務と、參政の權利との間には、何等因果の關係あるにあらざるなり。納稅額を以て選舉權の要件とするは、財産の多少を推定するの標準たるに過ぎざることは、財産の有無多少如何によりて、選舉人の學識、民徳、餘暇を推測すると、少しも異ならざるなり。現今制限選舉の制を採用するものは、我國及び英吉利の如き、其主たるものなり。此制度は、一定の財産を有し、從て平常政治上の利害に注目し、選舉の結果に就き是非の判斷をなすの能力ありと認むべきものにあらざれば、選舉權を與へざるが

故に、下層の貧者愚者をして、選舉の純潔公平を害せしむることなきを得べきも、尙比例代表の本旨に反することを免かれざるを欲點とす。何となれば、制限選舉制度は、一定額の財産を基礎として、其上下により、選舉權を有するものと、否らざるものとを二分し、有權者には均一の選舉權を與ふるに過ぎざるか故に、社會上層少數優者、尙他の多數の人民に壓せらるゝの結果を生せしむるべければなり。未だ社會の勢力を實際に比例して、議會に反映せしむること能はざる也。

次に復數選舉とは、財産の多少により一人の選舉人に、普通の投票權の外に、尙數多の投票權を與ふるの制度を云ふ。現今この制度を取るものは、伯耳義なり。全國の制度によれば、年齢三十歳以上にして、年々少くとも其占有する住所、又は建物に付國稅五(フラン)以上を納むるもの、若しくは年齢廿五歳以上にして、少くとも二千(フラン)の價格を有する不動産を所有する者等には、普通一般の投票權の外、更に尙一票の投票權を附加す。此制度は、財産額の多きものにはこれに應じて多くの投票權を與ふるが故に、前に述べたる制限選舉の缺點を補ふことを得べし。然れども、一方に於ては選舉權下層に及ぶが故に、選舉の自由公平を保つに於ては、制限選舉の如く有効なること能はざるのみならず、單に財産額に應じて、選舉權に差等を附するは、金力即ち權力たるの弊を助長し、偶々以て少數富者の專權を誘致し、社會上下級の間に不知を生ずるに至るの恐れあり。

最後に等級選舉とは、選舉人の財産額に應じて等級を設け、其の數額多きものには、其の少なきものより多くの選舉權を與ふるの制度を云ふ。此の制度は、其の昔羅馬の「セルピヌスチユリウス」の改革の際に於て、其の端緒を發したるものにして、現今普露西に行はる。我が國に於ても、市町村會議員の選舉は、當初より此の制度によるが故に、其の方法手續は既に諸君の熟知せらるゝ所な

るを信ず。此制度は、下層人民に選舉權を得せしめながら、多數の貧者が少數の富者を壓するに至らず、能く貧富に應じて、適當に代表者を得せしむる點に於て、最も完全なりと謂ふべきも、富者專權の弊を招くは、復數選舉と異ならざるのみならず、富の分配の狀態如何によりては、全一額の財産を有するものと雖も、或選舉區にありては一級として選舉に參與し、他區にありては二級若しくは三級に屬するの不公平なる結果を生ずるの缺點あり。故に此の制度は、市町村の如く選舉區を設くるの必要なさか、又は各地方の經濟上の狀況、略ぼ全一なる國家に於ては、採用するに適すれども、廣く國會議員の選舉に用ふる能はず。

